
大好きな君へ

空太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大好きな君へ

【Nコード】

N6554H

【作者名】

空太

【あらすじ】

ヒナギクとハヤテの恋愛小説です

1話 彼女と僕（前書き）

どうも初投稿です

おもしろくないと思いますが

人助けとおもって読んでください^^

1話 彼女と僕

こんにちはぼくは、三千院家の執事をしている綾崎ハヤテです。
今からお嬢様を起こしにいくところです。

「ハヤテ君」

この人は三千院家で働くメイドさんのマリアさん
まだピチピチの17歳です

「・・・」

「どうしましたか？マリアさん」

「いえ、何か気にさわることを言われた気がして・・・」

「アハハ・・・」

「それよりもハヤテ君、今日は学校ですよ」

「はい！なのでお嬢様を起こしに行こうと思ひまして・・・」

「そうでしたか、ではおねがいますね」

「はい！」

コンコン

「失礼します、おはようございますお嬢様」

「んん．．．？ああ、ハヤテか．．．」

この人は三千院家のお嬢様、三千院ナギお嬢様です。

「お嬢様、今日は学校ですよ」

「太陽がのぼったから休む．．．」

「．．．そういわずに」

「だめだ．．．今日はリ。レウスをたおさなくてはならないのだ」

「．．．学校から帰ってからではだめなのでしょうか？」

「だめだ！！」

「でも．．．」

「ええい！！学校はハヤテ一人でいつて来い！」

「コラ、ナギ！あまりハヤテ君をこまらせてはいけませんよ」

「ううマリア・・・」

「いいんですか？ナギがいない間にハヤテ君が桂さんたちと仲良くなっても・・・」

「ううっ・・・」

「どうしたんですか？二人とも？コソコソして・・・」

「いや、何もないぞハヤテ、あと私も学校にいくぞ」

「ええ！！学校いくんですか！！」

「ああ・・・」

「では僕準備してきますね！」

く学校く

「おはようナギ」

「おはようハヤ太君!!」

「おお早いなハヤ太君」

「今日はナギぽんもいつしよか」

上から、鷺宮伊澄さん 瀬川泉さん 花菱美希さん 朝風理沙さん
です

「おはようございますみなさん」

「そういえばヒナがどこにいるか知らないか？」

「いえ知らないですけど・・・」

「いやゝ仕事をさぼって来ているから怒ってないか心配なのだよ」

「怒ってないわけないでしょ」

「」「ヒナ(ちゃん)!!」「」

「ヒナギクさん／＼／」

「・・・ヒナギク」

「どこにいるかと思ったらこんなところにいたのね」

この人は白皇学院生徒会長、桂ヒナギクさんです

「ちゃんと仕事手伝いなさいよ！」

「」「逃げるが勝ち」「」

「ああ！！待ちなさい！！」

「・・・」

「おいハヤテ・・・」

「・・・」

「ハヤテ！！」

「はへ！？」

「「はへ」とはなんだ・・・」

「すみません・・・それでなんでしょう？」

「いや、今日放課後に伊澄の家に遊びに行くから一人で帰れ」

「はい、分かりました」

（放課後）

「じゃあいつてくるぞ」

「いつてらっしゃいませ」

（僕も帰ろうかな）

「ふーやつと逃げれた」

「ヒナちゃん足速いからたいへんだったね」

「逃げれたしどこか行くか」

（ずっと追いかけてたのか？・・・それよりヒナギクさんたいへんそうだな・・・

よし！ヒナギクさんを手伝おう！！）

（生徒会室）

コンコン

「どうぞ」

「失礼します」

「ハヤテ君じゃないどうしたの？」

「いえヒナギクさんの仕事を手伝おうと思ひまして・・・迷惑ですかね？」

「うつん全然迷惑とかじゃないんだけどナギはいいの？」

「はいお嬢様は伊澄さんの家に行かれていますのでだいじょうぶです」

「そうなんだじゃあおねがいしていい？」

「はい！」

く2時間後く

「ふうハヤテ訓が手伝ってくれたからはやく終わったわ」

「いえそんなことないですよ・・・あつ紅茶入れますね」

「うん・・・ありがとう」

「どうぞ」

「ありがう・・・ハヤテ君紅茶入れるの上手ね」

「いや／＼／＼そんなことないですよ／＼」

それから僕たちは色々話を話した

「あゝもつこんな時間」

「ほんとですね・・・家まで送りますよ」

「えっ・・・／＼／＼いいの？」

「はいヒナギクさんが危険な目にあったらたいへんですし・・・」

「うん・・・／＼／＼ありがとう／＼」

＼帰り道＼

僕たちは何故か無言だった。二人ともだまって歩いていた

けど、その沈黙をヒナギクさんが破った

「ハヤテ君って歩のことが好きなの？」

「ゴフ！！何を急に／＼」

「いや・・・ちょっと気になって／＼」

ちなみに歩というのは西沢歩さんといってばくのもとクラスメートです

「西沢さんは友達としては好きですけど、恋愛とかではなくて・・・
／／／」

「・・・そうなんだ／／／」

「ヒナギクさんはいるんですか？好きな人？」

「ほえ？／／／何よ急に！」

「いえすこし気になって」

「・・・いるわよ／／／」

「え？」

「いるわよ好きな人／／／」

「へ・・・へえゝそうなんですか・・・」

「うん・・・すごく鈍感だけど、とても優しい人よ／／／」

「そうですか・・・その人にヒナギクさんの想いが届くといいですね・・・」

「・・・うん」

気づいたら僕らはヒナギクさんの家の前にいた・・・

「じゃあハヤテ君また明日」

「はいさようなら・・・」

僕は今日知ってしまったヒナギクさんに好きな人がいるということ。
だから僕のこの想いは、胸の奥にしまっておくことにした。
そして僕は彼女の恋が叶うことを願った。

2話 彼への想い（前書き）

更新遅れてすみません
ではどうぞ

2話 彼への想い

わたしはベットにたおれこんだ

「ハア」

さっきわたしは好きな人と帰ってきた

「何であんなこといったんだろう」

鏡を見るとまだすこし顔が赤かった

（ヒナギクさんの想いがその人に届くといいですね・・・）

本当は言いたかった、この想いを届けたいのはあなただと・・・

けどいえなかった

うんとつぶやいて、うなづくことしかできなかった

（もう寝よう・・・）

そしてわたしは深い眠りについた・・・

次の日

　　いつもの朝・・・

　　ではなかった・・・

　　なんだか頭が痛い、体も熱い

　　（風邪かな・・・？）

　　けど今日は学校があつた

　　（生徒会長として休むわけにいかないわね）

　　私は制服を手に取った

「学校」

「おはようございます、ヒナギクさん」

「おはよう・・・あれナギは？」

「お嬢様は「昨日行ったから行かん！」といって・・・けどだいいょうぶですか？なんだかしんどそうですよ」

「だいじょうぶよ・・・すこし風邪気味なだけ」

「そうですか・・・けど無理はしないでくださいね」

「うん・・・」

だいじょうぶといったがだいじょうぶではなかった

時間がたつにつれ頭痛がひどくなってきた体もさらに熱くなってきた

授業も全く聞けなかった

そして午前中の授業が終わった

（昼休みか・・・）

弁当を食べる気もおきなかった

（生徒会の仕事でもしよう・・・）

わたしは時計塔に向かった

けどだんだん体に力が入らなくなってきた

そして意識が遠のいてきた

気が付くと私はベットに寝ていた

私はまわりを見た

（もしかしてここって・・・）

「お目覚めになりましたかヒナギクさん」

「ハヤテ君なんでこんなところに？」

「ヒナギクさんが心配で・・・5時間目が終わったので様子を見にきたんです」

「え！？今5時間目終わったところなの！？何で起こしてくれなかったのよ！？」

「落ち着いてください！！熱が上がっちゃいます！！」

「熱？ていうか何で私こんなところにいるの？」

「ヒナギクさん、時計塔の下で倒れてたんですよ」

「倒れてったて・・・ハヤテ君がここまで運んでくれたの？」

「はい、そうですけど・・・」

「そ・・・そうなんだ／＼ありがとう／＼」

「いえそれより今日は家に帰ったほうがいいのでは・・・？」

「へ？」

「いえ、熱があがってこないうちに家に帰ったほうが良いと思います」

すけど・・・」

「けど、次の授業が・・・」

「次の授業は自習だと思いますよ」

「え？何で？」

「次はたしか世界史の授業でしたけど、桂先生は二日酔いで頭が痛いとおっしゃっていたので 自習になりそうだな～と思ひまして・・・」

「・・・分かったわ今日は家に帰っておとなしくしてるわ・・・」

「では僕は先生に伝えてきます」

〈教室〉

「すみません桂先生」

「どうしたの？綾崎君」

「いえヒナギクさんの体の具合が悪いので早退の許可をもらいにきたのですが・・・」

「ヒナが！？だいじょうぶなの！？」

「はいー応熱は下がってはいますが、また上がってくるかもしれないです」

「早退は別にいいんだけど、ヒナ一人でかえるのよね・・・？」

「そういうことになりますね・・・」

「綾崎君ヒナといっしょに帰ってくれない？」

「ええ！！僕がですか！？」

「そうだけどいやなの？」

「いやとかではなくて、授業はいいんですか？」

「ああ、どうせ自習にするつもりだったしいいわよ」

（ほんとに自習になるなんて・・・）

「分かりました・・・」

（保健室）

「あのヒナギクさん・・・」

「あ・・・ハヤテ君どうだった？」

「いいとのことですけど・・・」

「けど・・・？」

「僕が付き添いをするになっちゃいました」

「え？／／ハヤテ君が？いいの？」

「はい桂先生にたのまれて・・・」

「へ・・・へ／／／じゃあ、おねがいね／／／」

く
帰り道く

「大丈夫ですかヒナギクさん？」

「だいじょうぶよ・・・ていうかそれきくのもう10回目ぐらいよ

「けど、ヒナギクさん足がふらついていきますし・・・」

「だ・・・大丈夫よこのくらい・・・」

「でも・・・そうだ!!」

ハヤテ君がそういったとき私の体は宙に浮いた

「きゃ!!」

「こうすれば大丈夫でしょ」

（これってもしかして／＼お・・・お姫様抱っこ!!／＼／

人気はないけどこれは、恥ずかしすぎるわたしはりんごみたいに赤

くなつた

「あれ？ヒナギクさん体熱いですねだいじょうぶですか？」

（この鈍感男・・・誰のせいだと思ってるんだか／＼／＼）

「そ・・・そんなことないわよ／＼／」

けど安心できた

（ずっとこのままでいられたらいいのに・・・）

なんだか眠たくなってきてしまった・・・

わたしは目を閉じた

「ヒナギクさん着きましたよ」

「・・・」

「あれ？ヒナギクさん？」

「・・・」

「寝ちゃってる・・・そんなにしんどかったのか」

ピンポーン

「はい」

「あっ・・・綾崎です」

がちゃ

「綾崎君どうしたのこんな・・・ヒナちゃん！！綾崎君どういづことなの！？」

「お・・・落ち着いてくださいお母様！！ヒナギクさんは眠っているだけです！！」

「え？・・・そうなの？」

「はい・・・学校を早退してきたのですが、ヒナギクさん途中で寝てしまったみたいで」

「そうなの・・・じゃあヒナちゃんを部屋まで運んでくれるかしら

「？」

「はい」

「リビング」

「ありがとう綾崎君」

「いえいえ」

「あとねもうひとつ頼んでいい？」

「はい・・・」

「今日家に泊まってくれない？」

「えー！！」

「そんなに驚かなくても・・・」

「驚きますよ・・・」

「今日夜勤があつてヒナちゃんを一人にしなきゃいけないんだけど心配で・・・」

「そうでしたか・・・マリアさんに頼んでみます」

「あつ・・・その人には私が頼んでおいたわ」

「そうでしたか・・・」

（というか僕に拒否権なかったということか・・・）

「ですが着替えなどがお屋敷なので一度取りにかえらなくてはならないのですが・・・」

「だいじょうぶよSPの人が届けてくれるらしいから」

「そ・・・そうですか」

（30分後）

「ありがとうございます」

「じゃあ、わたしもいつてくるわね。ヒナちゃんをよろしくね」

「はいわかりました。いつてらっしゃいませ」

（じゃあヒナギクさんの様子を見に行ってみるか）

くヒナギクの部屋く

目が覚めるとそこは見慣れた景色だった

（あれ・・・？私なんでここに？）

記憶をたどってみる・・・

（たしか、早退してハヤテ君といっしょに帰ってきて、急ににお姫様抱っこされて、眠たくな

ってきて・・・そのまま寝ちゃった！？）

私はとてつもない羞恥心におそわれた

（あれ？私なんでパジャマ？もしかしてハヤテ君が・・・／／／」
脳みそが沸騰しそうなくらい熱くなった

コンコン

「失礼します・・・あれ？ヒナギクさん起きたんですか」

「は・・・ハヤテ君！！／／／何でここに！！」

「え？・・・お母様に頼まれて今日泊めさせていただくことになったんです」

「そ・・・そうなんだ／／／（ここは聞くしかないか・・・）ハヤテ君ひとついい？」

「はい？」

「わたしをパジャマに着替えさせたのってハヤテ君・・・？／／／」

「ゴフ！！！！ち・・・ちがいます！！！！／／／お母様ですよ！！！」

「そっか・・・／／／（よかった）」

「僕、おかゆでも作ってきますね」

「私も作・・・」

私はたちあがって彼をとめようとした

・・・が足がふらついてしまった。私は彼の方に倒れた

そしてわたしは彼の胸にすっぽりおさまった

私には彼の胸の鼓動しか聞こえなかった

するとその音はだんだん速く、大きくなってきている気がした

（え・・・？）

すると彼は私をベットに座らせた

「おかゆは僕が作りますのでヒナギクさんは休んでいてください／＼」

彼は急いで部屋から出て行った・・・

3話 伝えられない理由（前書き）

今回は少し短いです。

それと、学校が始まってしまったので

更新が遅れてしまうと思います

本当にすいません

ではどうぞ

3話 伝えられない理由

まだ心臓のドキドキがおさまらなかった

（だめだ・・・この想いはしまっておかないと）

けどしまつてある想いがあふれていく

（だめだ・・・僕にはこの想いが伝えられない理由があるんだ）

確かに彼女に好きな人がいるというのもあるけどそれよりもずっと大切な理由があつた

僕が好きになつた人は不幸になる

ヒナギクさんを不幸にさせるわけにはいかない

だからこの想いは・・・

(・・・おかゆ作ろう)

僕はキッチンに向かった

「ヒナギクの部屋」

（さっきのハヤテ君の心臓の音・・・気のせいよね？）

「コンコン」

「失礼します、おかゆできましたよ」

「ありがとうございます・・・／＼／」

「どういたしまして、では冷めないうちに召し上がってください」

「うん／＼いただきます」

「おいしいですか？」

「うん、すごくおいしいよ」

「そ・・・それはありがとうございます／＼／」

「ごちそうさま」

「はい、僕は今からかたづけをするのでヒナギクさんはもうおやすみになってください」

「・・・ハヤテ君今日どこで寝るの？」

「え？一応はなれを使っていいとお母様にいわれたのですが・・・」

「いつしよに寝てくれない？／／／」

「え？／／／」

「あの／／／はなれじゃなくて隣にお父さんの部屋があるからそこを使っってという意味で あって

決して同じ部屋で寝るとかの意味ではないの！！／／／」

「分かりましたから大声出さないください、熱上がっちゃいます！
！」

「はい／／／・・・」

「ではゆっくり休んでください」

「うん・・・おやすみ、ハヤテ君／／／」

ヒナギクさんが笑ってそういった。

心臓が高鳴って、顔が赤くなるのが分かった

僕は彼女から少し目をそらして言った

「おやすみなさい、ヒナギクさん／＼」

僕は顔が赤くなっているのを見られたくなくて急いで部屋を出た

（僕、なにやってるんだろ・・・）

ヒナギクさんを好きになっではいけない、そう思うと胸が締め付けられる感じがして痛かった

（もう寝よう・・・）

僕はかたく目を閉じ、ヒナギクさんのことを考えないようにした。

そして深い眠りに付いた

「次の日」

ピロピロ♪ピロピロ♪

（んん．．．？電話？お嬢様からだ！）

「はい．．．」

「．．．クビだ」

「え．．．？」

「今すぐ帰ってこないとクビにする！！」

「ええ！！お．．．お嬢様！！」

（どうしようピンチだ！！！！）

「どうかしたの？」

「ヒ．．．ヒナギクさん！！いつからそこに！！」

「え？さっき来たところだけど．．．いったいどうしたの？」

「それはですね．．．（以下略）」

「ならすぐ行きなさい」

「でもヒナギクさん熱は・・・」

「私のことはいいからとにかく行きなさい!!」

「は・・・はい!! ありがとうございます!!」

僕は急いで荷物をまとめた

「ではヒナギクさんまた学校で」

「うんまたね」

僕は屋敷に向かった

「ナギにちょっとやいちゃうかな・・・」

僕はこの後のあんなことを知ることになるなんて思ってもいなかった

4話 知らされる真実（前書き）

遅くなつてすいません

これからはもつと更新が遅くなるかもしれないですけど「おもしろい」と思われる作品に出来るよう頑張ります
ではどうぞ

4話 知らされる真実

「ハヤテはもうまったく・・・」

私とハヤテは主と執事でもあるし、恋人同士でもあるのだ

それなのにあいつは私のことをほったらかして他の女の家泊まっていたのだ

メールをしても返事が来ない、電話をかけてもでない

（まさか・・・ハヤテが浮気を・・・！？）

ないない、そんなことは絶対にない！！ハヤテから告白してきたし、
いつだってハヤテは私に

メロメロな・・・

（・・・最近態度が冷たい気がする、ま・・・まさか心変わり！？）

これはハヤテに確かめなくてはダメだ・・・

ピンポーン

（帰ってきたか・・・）

（玄関）

（お嬢様そうとう怒っているよな・・・ここは正直に・・・）

ガチャ

「ただいまもどりました」

「おかえりハヤテ」

「あの、すいませんでした・・・何度も電話がかかっていたというのに・・・」

「そのことはもう良い・・・それより後で私の部屋に來い」

「はい分かりました」

私はそういうと部屋に戻った

（お・・・お嬢様怒ってなかったな、それにしても部屋に來いって何だろう？）

「おかえりなさいハヤテ君」

「あ・・・マリアさんただいまもどりました」

「どうしたんですかハヤテ君考え事してるみたいですけど」

「いえお嬢様に部屋に來いといわれてなんだろうと思ひまして」

「いってみれば分かることですよ・・・ナギも待つてゐるでしょうしはやく行ってあげてください」

「はい」

くナギの部屋く

コンコン

「失礼します」

「入れ」

「あのお嬢様・・・」

「今から私が言うことに正直に答えてくれ」

「はい」

「・・・ハヤテは私のこと好きか？」

私は彼を見つめながら言った

「はい・・・世界で一番大切な人ですよ」

彼は前聞いたときと同じ答えを返した

「・・・ほんとうだな」

「はい・・・」

「・・・そうかよかったそれとひとつ頼みがある」

「何でしょうか」

「二人でいるときくらい執事としてじゃなく恋人としていてくれ／＼」

「・・・どういう意味ですか？」

「だから・・・」

「僕とお嬢様っていつ恋人になりましたっけ？」

齒車が狂いだした

「何を言っているんだハヤテ！！お前が告白したんじゃないか！！」

「え・・・僕告白なんてしてないですよ」

「じゃあ、あのクリスマスのことはどういうことなんだ！？」

「僕がお嬢様を誘拐しようとした日ですか」

「え・・・そうだったのか・・・」

「お嬢様？」

「ハヤテのばかああああ！！！！」

私はそういつて部屋を出た

「お・・・お嬢様！？」

「どうしたんですかハヤテ君！？」

「マリアさん！！」

「何があっただんですか説明してください！！」

「実は・・・」

私は屋敷を飛び出したまさか勘違いだったなんて

気付いたら公園についた

休みであるというのに人一人いなくて静かだった

私は一人静かに泣いた

「もしかしてナギちゃん？」

私の目の前に一匹のハムスターが現れた

4話 知らされる真実（後書き）

ハヤヒナの話なんですけど

しばらくヒナギクが出てこないかもしれないです
ヒナギクファンのかた本当にすいません

5話 決心

「ハヤテ君何してるのかな？」

わたしはふと彼のことを考えた

私とハヤテ君はもとクラスメート

ハヤテ君は私の片思いの相手で今はナギちゃんの執事をしている

今日は土曜日だけど私は何も予定がない

（のどかわいたな）

なぜかフルーツオーレがのみたかった

けど、あいにく冷蔵庫にはフルーツオーレはなかった

しかも家の近くの自動販売機にはフルーツオーレがない

（うーんけど飲みたい・・・あ！！そういえばあそこの公園なら・・・）

「負犬公園」

「もしかしてナギちゃん？」

わたしの目の前にはハヤテ君のご主人様の小さな女の子がベンチに座っていた

顔が少し赤くて目も赤い

「ハ・・・ハムスター」

「ハ・・・ハムスターってだれのことなのかな!？」

「うるさい・・・今は一人してくれ」

「ふーんだ!わたしはフルーツオーレ買いにきたただけだもん!」

私はそういつて自動販売機のほうへいった

けどフルーツオーレは売り切れていた

わたしはフルーツオーレをあきらめてカフェオーレを2本買ってベンチに座っている少女の頬に当てた

「ぬあああああ！！！！何をするのだ！？」

「ほらこれあげる・・・隣座っていいかな？」

「おまえ・・・一人にしてくれといっただろう」

「けど友達が泣いてるのに見てみぬふりなんて出来ないんじゃないかな？」

「・・・」

「何かあったんだったら聞くよ・・・」

「うん」

その子はわたしに今日の朝のことを話してくれた

「わたしはどうすればいいのだ・・・今のままじゃ私はハヤテに何をしてしまつか分からない　それが怖いんだ」

少女はすごくつらそうな顔をしていた

私は少し考えた、そして私は言った

「ならナギちゃんがハヤテ君に告白すればいいんじゃないかな」

「え・・・？」

「だから前の告白が勘違いだったんだからナギちゃんに告白すればいいじゃない？」

「けど・・・」

「大丈夫だって私も一回ふられてるんだから！」

「・・・」

「それにこのままじゃ後悔しちゃうよ・・・」

「うん分かった・・・告白してみる」

「よし！じゃあがんばってね」

「ああ・・・」

「じゃあね・・・」

「うん」

私は公園を出ようとした・・・

「おい！ハムスター」

「ん？どうしたのかな？」

「あの・・・その・・・ありがとう」

「・・・どういたしまして!!」

私は笑っていった

家へ帰ろうとしたときだった・・・

「西沢さん!!」

後ろを振り返ったら片思いの彼がいた

「ハヤテ君？」

「西沢さん!!」

彼は息を切らせていた

「お嬢様を見ませんでしたか？」

「公園にいるよ・・・」

「ありがとうございます」

彼は公園に走っていった

(・・・がんばってねナギちゃん)

5話 決心（後書き）

遅れてすいません・・・

テストが近いのでさらに遅れそうです・・・

ですがちゃんとつづけますのでお願いします^^

6話 告白(前書き)

今回はかなり短めです・・・
ではどうぞ!!

6話 告白

「ハヤテ・・・」

あいつの名前をつぶやいた

心臓がドキドキする

あいつはなんていうだろうか

私みたいな子供相手にしてくれないだろうか

けど、この思いを伝えないと後悔する

だからわたしは・・・

「お嬢様!!」

「ハヤテ・・・」

ハヤテは私を探しに来てくれたみたいだ・・・

ハヤテは息を切らしていた

それだけ探し回ってくれたみたいだ

「ハヤテおまえに話がある」

「はい」

「私はクリスマスの日におまえに告白されたと思ってたんだ。今それが勘違いとわかってしまったけど私はお前が好きだ」

少し沈黙が続いた・・・

そしてハヤテが口を開いた

「お嬢様、僕は・・・お嬢様の気持ちにお答えすることは出来ません」

「そうか・・・けど覚悟しとけよ！いつかお前が惚れるような女になつてやるからな！！」

私はハヤテの声をさえぎって言った

「・・・お嬢様」

「あと・・・これから私の執事をしてくれ」

「はい！」

「よし！！帰るか！！」

「はい！」

私たちはゲームの事や漫画のことを話した

けど不思議だ

今、私は私の告白を断ったやつとこんなに楽しく話している

ふとハヤテのほうを見た

ハヤテは「どうしましたか？」とこっちを見て微笑んだ

ああそうか・・・わたしはこいつのことが本当に好きなんだ

鈍感で女顔だけど、頼りになって呼んだら助けに来てくれるこいつが好きなんだ

よし・・・ハヤテ、覚悟しとけよ、いつかお前から告白してくるよ
うな女になるからな！！

「なんでもないぞハヤテ・・・よし屋敷まで競争だ！！」

「ま・・・待ってくださいお嬢様！！」

6話 告白（後書き）

読んでいただきありがとうございます

一応一章完結です

次からはヒナギクに出てきてもらおうと思います^^
あと評価、感想おねがいします^^

7話 あふれる想い

午前4時目覚ましが鳴った

僕は体を起こして目覚ましを止める

最近はテストが近くなっているから結構遅い時間まで勉強している
だからさすがに眠たかった

けど執事としてそんなことはいってられない

僕は執事服に着替えて、キッチンへ向かった

（6時）

「おはようございますハヤテ君」

「おはようございますマリアさん」

「今日も早いですけど大丈夫ですか？」

「え？」

「いえ昨日も夜遅くまで勉強していたみたいですし・・・」

「だいじょうぶですよ、こついつの結構なれていますし」

「そうですか、けど体調には気を付けてくださいね」

「はい!!」

「おはようハヤテ」

「あ、お嬢様おはようござ・・・ええええ!! \$ # & a m p ; %
& a m p ; & a m p ; % % ! ! 」

「何だそのお化けを見たような奇声は・・・」

「お嬢様どうしたんですか!?! こんな時間に起きているなんて!?!」

「いや、たまにはいいかなと思って・・・」

「そうですか・・・何はともあれお嬢様が一人でおきてくれるなんて・・・」

「私もやる時はやるのだ!!」

「もちろん学校には行かれますよね？」

「・・・え？」

「だってこんなに早く起きたんですし、行かないともったいないですよー!!」

「・・・よし一眠りして来るか」

「ええー!!お、お嬢様」

僕は何とかお嬢様を説得し、お嬢様と二人で学校へいくことになりました

↓学校↓

「おはよー!!ハヤ太君」

「おはようございます」

「珍しいねナギちゃんが月曜日に学校に来るなんて」

瀬川さんの言うとうりだった

お嬢様は「休み明けに学校になど行きたくない!!」なんていつて休んでしまう

「ふん!わたしだって来る時は来るのだそれより他の二人はどうしたのだ」

「それがふたりそろって風邪で休みなんだー」

「それはたいへんですね」

そういえばヒナギクさんは大丈夫なんだろうか？

あの時大丈夫とは言ってたけどあれから熱が上がったりしてないだろうか？

「ハヤテ君！」

僕は軽く肩をたたかれた。けど僕にはその声の主がすぐに分かった

「ひ、ヒナギクさんおはようございます」

「おはよう♪ハヤテ君」

「ヒナギクさん風邪の方はだいじょうぶなんですか？」

「うん！もう大丈夫よ！」

「はい！みんな席についてHRはじめるわよ」

先生が来たので席に着く

そしてこの人はとんでもないことをいいだした

「よーし席替えするわよ」

（はああああああああ！？）

この教室にいる人全員が思ったと思う

少なくとも僕は思った

いまはテスト前だそれなのにこの教師は・・・何を考えているんだ
るうか？

ヒナギクさんやその他生徒の反論もあつたけど先生は聞く耳を持た
ず結局席替えをした

僕は窓際の一番後ろの席、お嬢様は教卓の目の前になってしまった

そしてヒナギクさんは・・・隣の列の僕の二つ前の席だった

（け・・・結構近くなったな／＼／）

ついついこんなことを考えてしまった

そんなことを考えているうちに、授業が始まった

授業の途中ふと彼女を見た

彼女は黒板を真剣に見てノートをとっているようだ

彼女に見とれていると先生に当てられた

あわてて黒板に向きなおし先生の質問に答える

何とかあっていた……

く休み時間く

「おいハヤテ」

「はい何でしょうか？」

「おまえあんまり授業中にボーとするなよ」

「はい……申し訳ございません」

「わ・・・分ければ良いのだ」

と言われたものの授業には全く集中できなかった

黒板を見ようとしたら彼女が目に入る

そうしたら彼女を見つめてしまう

だから授業なんて聞いていない

僕は結局授業を受けてないも同然で屋敷に帰った

「ふう終わった」

僕は屋敷に帰ってから部屋の掃除をしていた

ここのお屋敷は大きいから一日ではとても掃除しきれない

「終わりましたか？ハヤテ君？」

「はい」

「なら今日はもういいですよ」

「え？でもまだ夕飯の支度が・・・」

「私がやっておくので大丈夫です。ハヤテ君はテスト勉強を頑張ってください」

「で・・・でも」

「そうですかハヤテ君はテストは全然余裕なんですね。なら赤点ならクビということ・・・」

「はい！！べ・・・勉強してきます！！」

ぼくは自室に駆け込んだ

そして机に向かった

彼女の顔が浮かんた

（なに考えてるんだろう）

今日の彼女の後姿が目に見えんた

（だめだ・・・）

僕は想いを胸にしまいこんだ

けど僕はこの想いをいつまでしまっているのだろうか

しまいこんだ思いは今にもこの胸からあふれ出てきそうだ

けど僕は耐えなければならない

彼女の幸せのためにも

僕は教科書を開いた

それからのことだばくはぎりぎり赤点を逃れてクビを回避できた

7話 あふれる想い（後書き）

どうもなんか変になった気がします
そんなことで（オイ）感想等まっています

8話 文化祭（前書き）

遅くなつてすいません
しかも、すごく短いです
ではどうぞ

8話 文化祭

「あのお嬢様？なぜそのような服を着られているのですか？」

僕は鏡の前でお遊戯らしきことをしているお嬢様に聞いた

「うわああああああ！！！！ハヤテ！！！！何勝手に入ってきているのだお前は！！？」

「も・・・申し訳ございません！！！」

「せめてノックぐらいしろ！！！」

「はい！！！」

「ところで何なのだ??」

「いえ・・・なぜ二人ともコスプレなんかしているのかと思いましたが??」

「コスプレなどしていない！！これは文化祭に着ていく服だ！！！」

「文化祭にですか??」

「ああ、ハヤテははじめてか」

「はい・・・」

「ちがいます!!」

「マリア!!」

「ナギ勝手に変なこといわないでください!!ちゃんとした仮装ですよ」

「生徒じゃなくても仮装しなければいけないんですか？」

「ああ学校に入るだけでな、それに先生も仮装しないとだめだしな」

「それはすごいですね・・・」

「ああ、あと夜にダンスパーティーがあるんだ」

「へーそうなんですか」

「けどハヤテはどうするのだ？」

「何がっておまえも仮装しないと入れないじゃないか」

「あ!!そっいえばそうですね」

「ちなみに女装もokだぞ」

「しません!!」

「(けど、どうしようかな・・・?)」

なんて考えながらパーティー当日

（白皇）

「・・・ハヤテ」

「？なんですか？お嬢様？」

「・・・その仮装あんまりいつもと変わってないと思うんだが・・・」

「

「そうですか？けどokもらえましたよ」

「そうだな」

そのときの僕の仮装はいつもの執事服にマントを着ただけだった

「ちなみにそれは何の仮装なのだ？」

「一応吸血鬼のつもりだったんですけど・・・」

「わかりにくいだろ・・・」

「あははは・・・あれ？あそこにいるのってヒナギクさんじゃ・・・」

「

僕が言いかけたときだったそのヒナギクさんらしき人はこっちをチラッと見て走って逃げていった

「こつち見たよな？」

「はい、見てました」

「本当にヒナギクだったのか？」

「いえ、RPG風のコートを着ていてはつきりとは・・・」

「そうか・・・とにかく会場に行くか」

「はい」

そのとき、僕にはこれから起こることは想像もできなかった

9話 文化祭 2

「はあ、なんでいきなりハヤテ君に会っちゃうのよ……これも全部お義母のせいなんだから」

「3時間前」

「いってきます」

「いつてらしゃいヒナちゃん……ん？」

なぜかお義母さんが不思議そうな顔をした

「どうしたの？」

「今日って文化祭よね？」

「そうだけど……」

「ヒナちゃんなんで制服なの？」

「うっ……」

「そんなのダメよね？」

「だいじょうぶよ！！裏から入ればれないし」

「生徒会長なんだからちゃんとしなさい」

「え・・・？ちよつと・・・お義母さん！！」

わたしは仮装する羽目になってしまった

「似合ってるわよヒナちゃん」

「もうお義母さん・・・」

結局私は誰にも気付かれないように裏門から入り、校舎の裏に落ちていたRPG風のコートを着ることにした

そして現在に至る

（あぶなかった〜こんなかつこハヤテ君に見られたら・・・／／／とにかく生徒会室で隠れておこう）

「あの〜？」

「ほへ！？」

「ヒナギクさんですよね・・・?」

（ハヤテ君!?!?何でここに!?!?とにかくここはとにかくごまかさないと・・・）

「え?・・・そんな人知らないですけど（裏声）」

「そうですか・・・」

（どうにかごまかせたわね）

「じゃあ私先を急ぐので・・・」

わたしは、走ってその場を離れようとした

「あ!?!あぶない!?!」

「え?」

この場から離れることに必死だった私はその先が崖とも知らずに進もうとしていた

そして足を踏み外しそうになった瞬間、彼が私の腕を強引に引っ張った

そしてわたしは彼の方へ倒れた

「いたたたた・・・」

「だいじょうぶですか・・・ヒナギクさん!？」

「え？」

私はパニックった

まず自分がハヤテ君を押し倒しているような体制になっていること
そしてコートがどこかへ行ってしまったていること

「あの、その、これはねお義母さんが無理やり・・・!!」

「おいハヤテここにいたのか・・・ん？ひ・・・ヒナギク!？」

ナギがびっくりした顔でこっちを見た

それもそうだと思う。今の私はいつもからは想像できないと思う
そう、今の私の仮装はおとぎ話出てきそうなお姫様の仮装だった

「どうしたんだそのかつこ!？」

私はごまかすように

「ほらダンスパーティー始まるわ行きましょう／＼」

会場に行ってからがさらに大変だったいろんな人に誘われてやつの
思いで抜け出した

わたしは庭のベンチに腰掛けた

（ハヤテ君と踊りたかったな・・・）

「ヒナギクさん」

「ハヤテ君・・・」

「大丈夫ですか？」

「うん」

少し沈黙が続いたそして

「僕と踊っていただけませんか？」

「え・・・？」

「いえ！・・・いやなら別にいいんです！..」

「そんなことないわよ」

私は彼の手をとった

「いきましょう・・・ハヤテ君」

「はい」

「ヒナギクさん、ダンスは初めてですか？」

「うん」

「なら、僕がリードしますね」

「は・・・はい／＼」

私はハヤテ君を直視できなかった

彼との距離が近すぎた

「ヒナギクさん初めてなのにお上手ですね」

「ハヤテ君のおかげよ」

私は相変わらず彼から目をそらしていった

もう少しで曲が終わる

もっといつしよにいたい

もっとこの時間が続いてほしい

無情にも音楽は終わりを告げた

「あーやーさーきー！！！！！！」

「え・・・？」

「何でお前が桂さんと踊ってるんだよ！？」

「そんなことより桂さん！！次は僕と踊ってください！！」

「いえ僕と!!」

気づいたら私たちの周りには人だかりができていた

「ヒナギクさん逃げましょう!!」

「え・・・?」

彼は私をかかえ、人だかりを飛び越え、会場を飛び出した

そして彼は時計塔の下まで来て私を下ろした

「ここまで来れば大丈夫だと思いますよ」

「うん、ありがとう／＼」

なんとなく彼が王子様に見えた

ピンチになったら助けに来てくれる・・・

けど彼は、私の王子様じゃないのよね・・・

「ヒナギクさん?」

「え・・・!!?何!?!」

「いえ、すこし座りませんか?」

「うん」

そこから少し沈黙が続いた

その沈黙を破ったのは彼だった

「ヒナギクさんの仮装とてもかわいいですね」

「え・・・そんな嘘言わないでよ」

私はうつむきながら言った

すると彼は、私の頬に手を添えしばらく私の目を見つめてからいった

「嘘じゃないですよ」

その言葉はこの人生の中で一番のほめ言葉だった

私は彼との距離を少しずつ縮めていった

彼にも伝わったみたいだ

彼も私との距離を縮めていった

そして唇が重なる瞬間だった

彼は我に返ったかのように私から離れた

「す．．．すみません!」

「あ．．．こっちこそ．．．ごめんなさい」

「僕はお嬢様を迎えに行かなければならないのでこれで．．．」

彼は走り去った

「ハヤテ君のバカ．．．」

私は小さくつぶやいた

9 話 文化祭 2（後書き）

だらだらですみません

次はもっと早く更新できるようがんばります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6554h/>

大好きな君へ

2010年10月9日13時54分発行